

総務建設常任委員会行政視察報告

総務建設常任委員会は、去る 10 月 29 日及び 30 日の 2 日間、広島県安芸郡府中町及び尾道市を訪問し、防災行政及び観光行政について調査視察を実施しました。

視 察 日

平成 24 年 10 月 29 日（月）～ 30 日（火）

視察地及び視察目的

- 1 広島県安芸郡府中町（平成 22 年国調人口 50,442 人）
防災都市づくり計画について
- 2 広島県尾道市（平成 22 年国調人口 145,202 人）
フィルム・コミッションの取組みについて

視 察 者

鈴木道子委員長・中村文彦副委員長・近藤昇一委員・田中孝男委員・
土佐洋子委員・金崎ひさ委員
畑中由喜子議長（オブザーバー）、山本孝幸事務局長（随行）

府中町視察概要

1 府中町の概要

府中町は、広島市中心部から約 4 キロメートル、面積 10.45 平方キロメートルの町で、広島市の広域合併により周囲を広島市に囲まれ、安芸郡の飛び地という全国的にも特徴のある形態をしています。

府中という名が示すように、昔安芸の国府が置かれていたところといわれ、古代安芸国の政治文化の中心地であったといわれています。

昭和 12 年に町制を施行し現在に至っていますが、町村合併の歴史は一度もありません。平成の大合併では県から強く広島市との合併を勧められたそうですが、財政面等のデメリットも多く合併には至らなかったとのことです。

昭和 30 年代半ばから広島市のベッドタウンとして急激に発展し、丘陵地帯にも開発が進み、田・畑は姿を消し住宅街に変貌しました。また、マツダ(株)を中心とした工業の町としての一面も併せもっています。町財政面では、とりわけマツダ(株)の経営状況によるところが大きく、マツダ(株)を中心とした企業城下町ともいえます。

2 府中町防災都市づくり計画について

(1) 目的・位置づけ

防災都市づくりに係わる計画としては、災害対策基本法に基づく地域防災計画、都市計画法に基づく都市計画マスタープラン、耐震改修促進法に基づく耐震改修促進計画等がありますが、本計画はそれぞれの領域にとらわれることなく、災害に強い都市づくりを推進する上での重要な考え方、施策展開の方向性等を整理した総合的な防災都市づくりの指針となるものです。

また、官民協働で進める防災都市づくりとして、住民にわかりやすいかたちで、災害危険度等についての情報を公表・提供し、住民の防災意識、自己責任意識を育てることを目的とするものでもあります。

(2) 現状・課題（災害の危険度判定）

町内を 58 地区に分け、その地区ごとに地震災害時と豪雨災害時の危険度を 1 から 5 までに分類し、その情報を提供しています。

地震災害時の危険度判定

次の 4 項目について、危険度判定を行っています。

ア 延焼危険度

延焼領域率及び木造建ぺい率による判定並びに消防活動困難区域率による判定により総合判定を行い、地区別の延焼危険度を判定しています。

イ 避難危険度

道路閉塞率による判定及び一時避難困難区域率による判定により総合判定を行い、地区別の避難危険度を判定しています。

ウ 揺れ易さ危険度判定

「五日市断層による地震」、「安芸瀬～伊予灘地震」及び「直下型地震」の 3 つの地震を想定し、発生した際の“揺れ”を震度で地区別に危険度を判定しています。



なお、地質調査は、下水道工事時や公共施設建設時のものを活用しています。

エ 建物全壊危険度判定

揺れ易さ危険度判定で算定した「最大予測震度の重ね合わせ値」に「構造別・建築別年次に整理した建物データ」を掛け合わせ、建

物が全壊する危険性を建物全壊棟数率として表し、危険度を判定しています。

豪雨災害時の危険度判定

次の2項目について、危険度判定を行っています。

ア 土砂災害の危険度判定

「洪水(府中大川)・土砂災害ハザードマップ」の土砂危険箇所(土石流・急傾斜)を基礎資料とし、各地区面積に対する被害想定区域の面積率を「土砂災害危険箇所率」として算出し、危険度を判定しています。

イ 浸水災害(河川氾濫)の危険度判定

府中大川及び榎川による浸水区域を重ね合わせ、浸水想定区域が重複する箇所について、“想定される浸水深”が深い値を採用し、各区域面積に対する浸水想定区域面積の面積率を浸水深ごとに評価し危険度を判定しています。

(3) 基本方針

防災都市づくりに向けて、次の3つの計画目標とテーマを掲げ施策を展開しています。

都市基盤施設等の充実(主に行政の役割)

安全に避難できる体制等の構築(官民等の連携・協働)

主な取組みは、次のとおりです。

ア 補助街路事業

平成19年度から社会資本整備総合交付金を活用し実施しています。

補助街路とは、「安全で快適に通行できる交通機能の向上を図るための道路」、「良好な住環境の向上を図るための道路」、「地域防災の強化を図るための道路」の3つを基本理念として、道路の幅員は原則6mで、概ね250m間隔の格子状に配置することを基本に町長が指定する道路です。

整備路線は、策定した補助街路ネットワーク基本構想図より、事業の容易性、緊急性、地域バランス等を参考に選定します。選定した路線は、説明会での意見を反映させて、整備事業に係る土地所有者の同意状況、事業効果、費用対効果、住民の整備要望状況等により判断し指定します。なお、用地は取引価格で町が買収します。

イ 狭あい道路整備事業

平成 24 年度から同様に社会資本整備総合交付金を活用して実施しています。

建築の際に道路とみなされ、敷地面積に参入できず建築をできない範囲等を町が買い取り、町道とするものです。

対象路線は、モデル地区内(5ha)の町道で建築基準法第 42 条第 2 項の道路に該当するもので、買取価格は固定資産税評価額となっています。なお、この事業は強制的なものではありません。

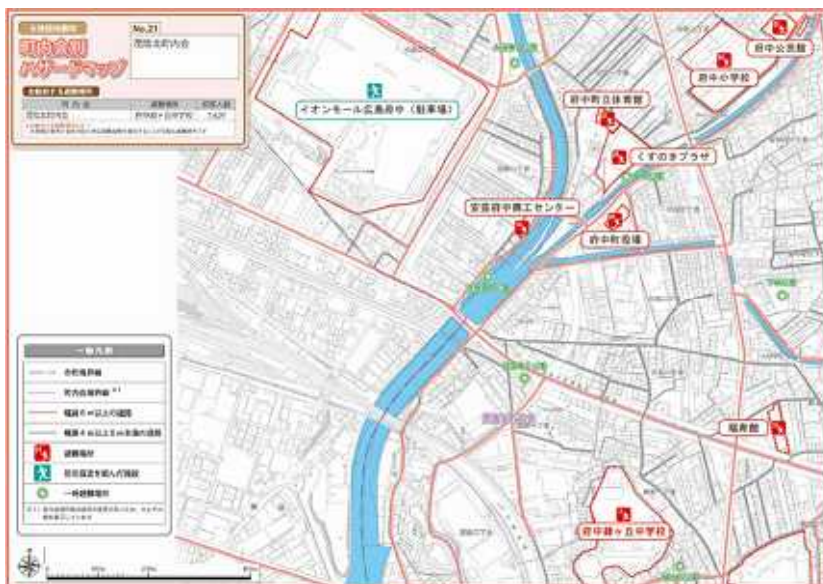
ウ 避難計画の策定

避難計画を策定する上での基礎資料となるよう避難人口、避難路、

避難場所等を

町内会単位
(68 町内会)

で検討し、自主防災組織による避難訓練などを実施するための資料として、37 地域に分類した「町内会別



ハザードマップ」を作成しています。【町内会別ハザードマップ】

防災意識の高揚（主に住民の役割）

自助力・共助力の向上を図る取組みは、次のとおりです。

ア 総合防災訓練

イ 地域の自主防災会による避難訓練、炊き出し訓練

ウ 防災出前講座

オ 被災者生活サポートボランティアネットワークの構築

社会福祉協議会、町内会や老人クラブ、女性会、医師会、薬剤師会、障害者福祉協会、民間企業等が協働して、災害発生時の連携と復興期に追いけるボランティア受入れから派遣を総合的に行うため、平成 22 年度に結成しました。

町内会単位の災害危険度判定や町内会別ハザードマップは、自分の住んで

いる場所がどのような危険があるのか知ることができ、災害時に迅速な避難行動等をとることを可能とし、地域一体での避難路策定などの取組みに大いに役立つ貴重な資料となるものです。

これらを活用し、“わが地域の防災マップ”にとどまらず“わが家の防災マップ”まで広がることを期待されます。今後、本町の防災施策を展開する上で大いに参考となるものです。また、揺れ易さ危険度の判定には、下水道工事時や公共施設建設時の地質調査など既存のデータを活用していることは、厳しい財政状況や行財政改革の観点からも学ぶべき点であります。

尾道市視察概要

1 尾道市の概要

尾道市は、対明貿易船や北前船、内海航行船の寄港地として、中世・近世を通じて繁栄をとげました。港町・商都としての発展は各時代に豪商を生み、多くの神社仏閣の寄進造営が行われました。

海を望む階段や坂道、路地越しに見える尾道水道、点在する寺院など、歴史を凝縮した景観に魅かれ、この地で「暗夜行路」の草稿を書いた志賀直哉、尾道の女学校に通った「放浪記」作者の林芙美子、この地をこよなく愛し描き続けた小林和作をはじめ、多くの文人墨客が足跡を刻みました。



また、古くは不朽の名作「東京物語」や尾道出身の大林宣彦監督の尾道三部作・新尾道三部作など、近年では数々の映像作品の舞台となり映画のまちとしても有名です。

明治31年、広島市に次いで2番目に市制を施行し、平成17年3月28日には御調町・向島町と、平成18年1月10日には因島市・豊田郡瀬戸田町と合併し、緑豊かな北部丘陵地域から尾道水道周辺地域を経て独特の多島美を有する瀬戸内海地域に至る、多彩な資源を有するまちとなっています。

2 フィルム・コミッションの取組みについて

尾道市では、歴史と伝統のある町並みや景観の保全に努めるとともに、住民一人ひとりが、自分達が住む町のすばらしさを理解し、自信と誇りを持って暮らせるまちづくりと、芸術・文化の振興が図れるよう、フィルム

コミッション活動を展開しています。

(1) 恵まれたロケーション

古く大きな寺社、昔ながらの古い街並み、海を望む階段や坂道、千光寺への坂道、路地越しに見える尾道水道、しまなみ海道の多島美等に代表される優れたロケーションを活かしています。



(2) フィルム・コミッション

尾道で撮影された映画は、昭和 28 年の名作「東京物語」をはじめ、40 作品以上あるそうですが、尾道出身の映画作家である大林宣彦監督の「転校生」(昭和 57 年公開)の撮影に当たり市民と行政が監督を支援した取組みが日本の「フィルム・コミッション」のさきがけとなったそうです。

なお、同監督の後の作品である「時をかける少女(昭和 58 年公開)」、「さびしんぼう(昭和 60 年公開)」とあわせて尾道三部作と称されています。

(3) おのみちフィルム・コミッションの設立と概要

おのみちフィルム・コミッションは、名実ともに日本一の「映画のまち尾道」を目指すとともに、映像を通じて、まちのイメージアップを図るため、尾道で行われる映画、テレビ、CM などの映像制作に関する各種サービスを提供することを目的として、尾道市、尾道商工会議所及び(社)尾道観光協会の 3 者で平成 15 年 1 月 15 日に設立されました。

全国的にはコンベンションビューロや観光協会でイニシアチブをとっているところもありますが、尾道では行政がイニシアチブをとっています。

業務内容としては、撮影候補地の情報提供(ロケーション情報の提供、各種許認可に関する情報の提供、シナハン、ロケハンの同行)、支援サービス企業の紹介(ケータリング等に関する情報の提供)、宿泊施設の紹介、エキストラ等の募集の手伝い、撮影現場の立会い、突発的な要望への対応などとなっています。

ロケでは、職員 1 名を張り付けて寝食をともにするくらいの支援を行っています。実質的に観光振興係の職員が 5 名体制でこれらの対応をすべて行っています。年間の予算は 30 万円で、使い道としては、過去にロケに来たプロダクション等にカレンダーや挨拶状を送ったりする程度で、ロケへの直接的な支出は一切ないそうです。

(4) フィルム・コミッション設立効果

短期的効果としては、ロケ隊の宿泊や食事代、機材購入、タクシー・レンタカー借上げなどの直接的経費と街の賑わい創出、地元住民の盛り上がりです。ドラマで 50~60 人のスタッフが 2~3 週間滞在するとのこと

で、それらの経済効果があるそうです。

長期的効果としては、「まちや地域の知名度向上」、「観光集客力強化(フィルムツーリズムの創出)」、「映像関連産業等の新ビジネス創出チャンス拡大」、「映像文化、芸術の振興」、「住民の『我がまち』意識高揚」が挙げられます。

市がフィルム・コミッションを行う一番の意義としては、“地元の盛り上がり”とか“我がまち意識の高揚”、いわゆる“尾道に住んでよかった、出身でよかった”という気持ち、誇りを持ってもらうことであり、それが一番の狙いであるとのこと。

なお、支援作品は、年間平均で50～60件となっています。

(5) 映画「男たちの大和 / YAMATO」のロケセット公開

尾道商工会議所など5団体で組織する実行委員会(大和ロケセット公開推進委員会)を設置し、「映画のまち尾道」を広くPRし、観光振興につなげたいとし、日立造船向島西工場内に製作された実物大の戦艦大和の一般公開を有料で行いました。公開は平成17年7月から18年5月までで、入場者数は約100万人、経済波及効果は推定40億円あったとされ、余剰金も出て、市に寄付があったとのこと。

(6) 尾道「てっぱん」推進協議会の設立

尾道が舞台のNHK連続テレビ小説「てっぱん」が平成22年1月決定され、来訪者の増加と経済効果の期待が大きく膨らみました。ドラマ内容の「鉄工所・造船」が「海事都市構想」と、「お好み焼き」が「食育・スローフードのまちづくり」と、「トランペット、ブラスバンド」が「音楽のまちづくり」というように尾道のまちづくりが凝縮したドラマであったとのこと。

平成22年2月19日、行政(市・県)、議会、経済界、観光関連団体・NHK広島放送局などで構成する“尾道「てっぱん」推進協議会”を設立し、番組を通じた誘致促進のための広報宣伝(舞台地となった自治体共通の誘客活動)、「てっぱん」をキーワードとした「まちづくり」の推進(尾道市独自活動)を柱とする活動を行いました。

市では、「てっぱん」をキーワードとした「まちづくり」の推進として、「食」を中心としたまちづくり推進の展開(鉄板イベントの開催、農林水産イベントへの鉄板活用、地域特有の鉄板食の創作)、「観光」を中心としたまちづくり推進の展開(ロケ地巡りコースの策定、産業観光の取組み、おもてなし気運の醸成)を行い、「地域資源の掘り起こし(再発見)」、「産業の活性化」、「人材ネットワークの構築」により、一過性でなく継続する「まちづくり」の推進を図りました。

なお、「てっぱん」をキーワードとしたまちづくりを担当する“てっぱん担当主幹(課長級)”を1人配置したとのこと。

(7) ビジット・ジャパン地方連携事業

平成 22 年、国の事業である「ビジット・ジャパン地方連携事業」として広島県庄原市と韓国テレビドラマ「サイン」を誘致しました。

国と地方が費用を折半して負担する事業でしたが、市ではこれまでロケに予算を支出したことがないということから、観光協会を窓口とし、契約に必要な 300 万円を市民からの寄付でまかかったそうです。

(8) お蔵出し映画祭

尾道市・尾道商工会議所・尾道観光協会・民間企業で構成する実行委員会が主催となって、毎年 10 月に開催しています。

年間約 400 本の公開本数を誇る日本映画界で、多くの映画が上映されていますが、劇場公開していない(お蔵入り)作品もたくさんあります。そんな劇場未公開作品や、DVD 化されていない作品、劇場でなかなか上映されない作品など、知られざるお宝映画を発掘して一挙に上映するというものです。

視察は、担当係長の案内で実際のロケ地も見学することができました。

「兼吉バス待合所」として残されている大林宣彦監督の映画「あした」のロケセット、港町・尾道を物語る倉庫を改築した「おのみち映画資料館」、千光寺公園展望台からの眺望、映画のロケ地となったポンポン岩、千光寺、千光寺新道、千光寺旧道、猫の細道、良(うしとら)神社など、どれもこれもが“映画のまち尾道”の財産であると実感しました。



尾道に住むことを誇りとする市民、尾道を愛する市民、いわゆる郷土愛を育むことがフィルム・コミッションの目的であり、そして育まれた郷土愛がフィルム・コミッションを支えているとつくづく感じました。

本町においても、観光と経済の面だけでなく、郷土愛の観点からも知名度と風光明媚なまちの特性を活かしたフィルム・コミッションの取組みを研究すべきではないでしょうか。すでにその下地と素材は揃っています。大いにまちを盛り上げ、元気のある葉山にしたいものです。

以上、ご報告いたします。

平成 24 年 12 月 14 日

総務建設常任委員会